

「庚申塔と道祖神

江戸時代の庶民信仰を伝える石造物



鳳字寺から北へ20メートルほど行く  
と、右手に階段があり、その上には、3  
匹の猿と2羽の鶏の彫刻を施した高さ  
160センチメートルほどの石塔が立って  
います。この石塔は、中国から伝わった  
庚申信仰に基づいて建てられた庚申  
塔といわれるもので、大阪周辺ではあ  
まり見ることができない珍しい石造物  
です。

古くから中国では、60日に1度巡っ  
てくる庚申の日の夜、人間が寝ている  
間に体内に潜む三尸と呼ばれる3匹の  
虫が抜け出て、その人が犯した悪事を  
神に報告し、寿命を縮めてしまうとい  
う言い伝えがあり、庚申の日は眠らず  
に一夜を過ごすという風習があったそ  
うです。このような庚申信仰は早くか  
ら日本にも伝えられ、江戸時代には庶  
民の間に広まり、庚申講といわれる信  
仰集団や庚申塔が各地につくられるよ  
うになりました。

中垣内地区にも昭和20年頃まで庚申



庚申塔



道祖神

講が存在し、庚申の夜には村人が集ま  
り、庚申塔のもとでお祈りした後、鳳字  
寺の堂前裏でこんにやくを食べて長寿  
を願ったそうです。庚申塔に彫られた  
3匹の猿と2羽の鶏の絵には、鶏が鳴  
く夜明けまでは三尸の虫に何事も「見  
ざる、言わざる、聞かざる」ようにして  
ほしいという人々の願いが込められて  
いると考えられています。

庚申塔の左脇には高さ30センチメー  
トルほどの道祖神の像がひっそりと  
立っています。道祖神は「塞の神」とも  
いわれ、古くから各地の村の守り神と  
してまつられ、後には道路の神や旅の  
神としても信仰されるようになりまし  
た。庚申塔と道祖神は、いずれも江戸時  
代の庶民信仰のありさまをうかがい知  
ることのできる貴重な文化財といえま  
す。

(生涯学習課)

「善宗寺

幾度の大火を乗り越えた真宗寺院



中垣内の庚申塔から北西方向に100  
メートルほど進むと、右手に浄土真宗  
本願寺派の金剛山善宗寺の山門が見  
えます。寺伝によると、平安時代中期の  
寛徳2年(1045)、当地に建てられ  
た金剛山恵信院寛徳寺という寺院が  
善宗寺の前身とされています。その後、  
寛徳寺は室町江戸時代初期(15世紀  
前半)17世紀前半)にかけて3度の大  
火に見舞われたそうです。

その後、復興に尽力した善了と宗円  
という篤信者の名にちなんで寺号を善  
宗寺と改め、江戸時代前期の寛文11年  
(1671)に西本願寺の末寺となりま  
した。当時、中垣内村の人々は、善宗寺  
の西に位置する東本願寺末の覚順寺を  
「西ノ道場」と呼んだのに対し善宗寺を  
「東ノ道場」と呼んだそうです。かつて  
北河内の真宗寺院では正月にくじで選  
ばれた門徒の代表が京都の本山に鏡餅  
を献上にあがる御鏡講という風習があ  
りました。善宗寺では平成26年まで  
20年以上にわたって講が継承されてい

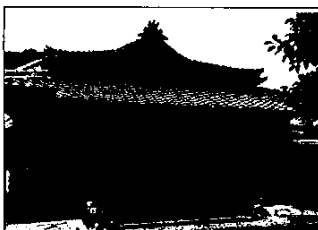
ました。

善宗寺の境内には本堂、鐘楼、山門、  
書院、庫裏などの建物があります。延享  
4年(1747)に建立された本堂は、  
一人でも多くの門信徒が集えるように、  
内陣(本尊を安置する間)よりも外陣  
(参拝者が座る間)の間取りが広くとら  
れており、今日では珍しい道場建築と  
いう様子を伝える建物です。本堂の裏  
手では寛徳寺のものと伝わる狛犬一对  
が木々に囲まれながらひっそりと残っ  
ています。大正8年(1919)につ  
くられた鐘楼の釣鐘は、太平洋戦争の  
最中、大阪陸軍造兵廠(大阪城付近に  
あった軍需工場)に金属供出されまし  
たが、奇跡的に無傷のまま残り、終戦後  
再び善宗寺に返還されました。  
山門から北へ30メートルほど行くと、  
再び中垣内越え(古堤街道)に出てき  
ます。次回は、在時の中垣内越えの繁栄  
ぶりについて紹介します。

(生涯学習課)



善宗寺の山門



本堂



鐘楼の釣鐘